



戦後日本の 出発点を振り返る

サンフランシスコ講和条約
署名を報じる1951年9月
9日付サンフランシスコ・
クロニクル紙（同紙提供）

在サンフランシスコ総領事
猪俣弘司

いのまた ひろし
一九七八年早稲田大学卒業、外務省入省。在
韓国大使館公使、国際法局審議官、南部アジア
部長などを経て、二〇一〇年八月より現職。

「四八カ国が日本とともに講和条約に署名」、一九五一年九月九日付サンフランシスコ・クロニクル紙は、微笑を浮かべる吉田茂内閣総理大臣とデイン・アチソン米国務長官が握手する写真とともに、日本全権団首席全権の吉田総理、池田勇人蔵相以下計六名の全権委員による署名の写しを一面トップに掲載し、連合国と日本との間の戦争状態を終結させたこの歴史的会議について大きく報じている（掲載写真参照）。

一九五一年九月八日は、日本が米国との敵対関係を終焉

させたのみならず、同盟関係を構築する第一歩を刻んだ日もあった。吉田全権は、講和条約署名後、市内プレシディオ陸軍基地内サービス・クラブ（現ゴールデンゲート・クラブ）において日米安全保障条約に署名している。文字通り、サンフランシスコは、その後の日米関係の出発点となった。しかし、当地が日米関係史の舞台に登場するのは、これが初めてではない。日米関係黎明期の一八六〇年、徳川幕府に派遣された万延元年遣米使節団および咸臨丸の乗員が最初に米国本土の土を踏み、一般米国人との交流が行われ

たのはこの地であった。一〇年後の七〇年八月、ワシントンD.C.の公使館設置に先立つこと一ヵ月余、海外初の日本領事館が当地に開設された。岩倉使節団は当地から米國横断の途に着いた。一九〇九年には、当地で渋沢栄一率いる渡米実業団が米側商業會議所代表と日米間貿易の増進拡張を図ることを決議し、民間外交の舞台ともなった。太平洋戦争勃発とともに閉鎖となった領事館は、終戦後一九五〇年に在外事務所として再開した。講和會議の全權団受け入れの際の苦労は想像に難くなく、地元日系社会から多大なる支援・協力を頂いたようである。講和条約が発効した五二年には、総領事館として復活し、今日に至る。

また、一九世紀後半多くの同胞が太平洋を渡り、当地で生活を築き、日本との繋がりを長きにわたり有形無形に維持してきている。日本人墓地管理にあたる加州慈恵会は、本年設立一一〇周年、日本国領事と米國人識者一名が対日理解増進を目的に設立した北加日本協會は一〇六周年、日系人一世が子女の日本語教育のため設立した非宗教系日本語学園である金門学園は一〇〇周年、北加日本商工會議所は六〇周年を迎える。

本年九月八日、当館は、国際社会に復帰した日本が歩んできた六〇年を包んで余りある歴史を持つ当地の日系社会

および米國の友人らとともに、日米安全保障条約署名の場所となったゴールデンゲート・クラブにおいて記念式典を開催、日米関係の来し方行く末に思いを馳せた。六〇年前、サンフランシスコ講和會議の際、当地で記念茶会を催されたご縁もあり、千玄室裏千家大宗匠がはるばる京都から駆けつけ、平和を祈願して献茶をしてくださった。

この六〇年間、日米両國は、最も信頼できる同盟関係を構築してきた。ここカリフォルニアでも古き伝統を継承する一方、シリコンバレーを中心に新しい分野の産業での日米協力が進み、日本との関係は確実に深化している。

六〇年前、駐日政治顧問であったウィリアム・シーボルド大使が講和會議を終えて当地を去るにあたり、「日本の人々は、日本全權団がサンフランシスコで真心からの待遇を受けたことを喜びとするだろう、また、この真心は将来の日米間の友好関係を予兆するものだと感じる」と語ったと報じられている。本年三月二一日の東日本大震災に際し、日本の被災者と被害に思いを寄せる実には多くの方々から、お見舞いのメッセージや義捐金が当館に寄せられた。サンフランシスコで、カリフォルニアで示されたこの真心と友情を、将来の日米友好関係の更なる増進に確実に繋げていかねばならないと感じている。■